

季刊 すまいる



ウサギ
ウサギの仲間、一般に野ウサギと穴ウサギに分けられる。野ウサギは生まれたときから開眼、有毛ですぐに走りだす。穴ウサギは草原や林に群れて住み、走ることはあまり得意ではなく、地中に巣をつくり、敵に追われると穴の中に逃げこんでしまう。
わが国の「日本白色種」は毛皮と肉との兼用種で、毛皮の質と肉質がよく、体が丈夫で子をよく生む。



ユリカモメ
鴨川の朝。キラキラと輝く川の浅瀬にユリカモメの群がエサをついばんでいる。
北の大地からはるばる京都へ。ユリカモメはカモメ科、全長四十センチ。河川や湖沼などに越冬し、春先にまた北の大地へ去ってゆく。
「そやけど、年々数がへつてきたわ」と毎朝エサを与えるファンの心配顔。



雪吊り
兼六園の冬の風物詩として有名な雪吊り。北陸特有の水分を多く含んだ重い雪から樹木の枝を守るための雪吊りには、「りんご吊り」「幹吊り」「竹又吊り」「しほり」の四つの種類があり、どの方法を使うかは樹木の種類や形によって決まる。



梅の花
寒さの厳しい早春から、百花にさきがけて咲き競うウメの花。
その昔、ウメはサクラと日本の国花の位置を争ったほど、日本人に親しまれてきた花木。
その歴史は古く、万葉集にもウメを詠んだうたが一〇四種もあり、同時期詠まれたサクラの三八種を圧倒していた。
当時は「花」といえばウメの花を指していたという。

寒蜆 しじみ
「納豆と蜆に朝寝おこされる」
古来、優良な蜆の産地として知られるのは、琵琶湖。いわゆる瀬田蜆だが、近年はあまり採れない。
昔の人は、蜆には特別な薬効があり、ことに黄疸にはこれに限るといわれていた。蜆は良質の蛋白質を含み、消化がよく、ビタミンB2を大量に含むので、肝臓の働きを強める。
正月のアルコール抜きの妙薬に！



謹賀新年



医療法人啓信会 理事長
中野博美

新年あけましておめでとうございます。みなさん、新しい年初を如何お迎えでしょうか。

さて、振り返りますと私共の医療界は、ここ数年と言うものの「医療崩壊」の文字が至る所に見受けられ、鬱々と忸怩たる思いで過ごしてきましたので、今年はそろそろ明るさを実感できる年になってもらいたいと思います。従って、この巻頭言も明るい話題にしたいところです。

一昨年夏の政権交代は、日本中が与党民主党に大きく期待を致しました。自民党時代、市場原理主義者達に食い荒らされた医療界も例外ではなく、今後の医療費の取り扱いや医師養成に関して、促進方向へ舵を切る期待が大きく膨らんだことでした。

新政権による医療界へのファーストインパクトは、中央社会保険医療協議会(中医協)委員交代劇でした。新政権が、日本医師会推薦の委員3名を再任しなかった例の件であります。その少し前、一昨年9月の中旬に東京方面から電話がかかってきた。曰く「医療側委員を全員替えるというのです。今までの議論の積み重ねが0になってしまいます。何とかして下さい！」と。私に何とかできる性質のものではないにしても

夜中にいろいろ電話をしました。この件は当時の政務官の担当でしたが、その後いろんな方面から注文もあつたのでしよう。最終的に発表された名簿には、前任の西澤委員、邊見委員も再任され、新任委員として、茨城県医師会代表の鈴木委員、山形大学の嘉山委員、そして最後の席に我らが京都府医師会の安達委員が決定しました。ただ、この一連の中医協委員任命に関して、新政権は不慣れな印象が強く、一抹以上の不安を感じさせたのでした。

その後、ネットプラス改定を獲得すべしと医療界が運動を推進している中、中医協は政権交代によるブランクをもものともせず、週2回開催で改定議論を薦進させていました。最終的に10年ぶりのネットプラスとなったこの改定は、全体として大病院指向性の強い改定内容と言われていますが、暗黒時代脱却の光明を感じさせるインパクトでありました。我々民間病院も一息つくことが出来たと思います。さて、いよいよこれからであります。

2012年度医療・介護同時改定の議論はもう既に始まっています。議論の中心は医療と介護のフィッティングの擦り合わせとされています。今回の担当課長は老人保健課長の経験もあり、医療介護を俯瞰し、老人保健課とともに今年1年次回改定に向けての議論を肅々と進めて行くのでしよう。注視して行きたいと思えます。しかしながら、ここに来てまた政治の影響が避けられないような気がしてなりません。民主党政権は政権交代直後の面影なく、首相交代後も組織の劣化は著しく、今後への底知れぬ不安を感じます。

新春草々、鬱々感の漂うこと甚だしいと言える。



京都きつ川病院創立30周年記念講演会

宗教学者・国際日本文化センター名誉教授

山折哲雄 先生

日本人のこころ

大人の背中・子ども素顔



中野理事長 ●京都きつ川病院では開設当初から医療・文化の発信基地を志し、毎年数度の講演会を開催しております。ここ暫くは春と秋と2回の開催をしております。本日は、山折哲雄先生です。山折先生と京都きつ川病院とは、私の父親がパーティーで一緒にさせて頂いて、お話をさせて頂いたところから始まっております。父親が医師の経験を元に、患者さんの「死」に関する事を何か申し上げたようです。死にゆく人にはどういう事を上げていたらいいかと。死にゆく人には「止める」「さする」「褒める」の三つの事をして上げたい。「止める」と言うのは痛みを止める事で、死が迫っているのに痛みが残っているのはいけない、痛みを止めて上げたい。「さする」と言うのは手足をさする事でして、思い通りに動かなくなつた手足をさすって貰うと気持ちが良い、うんとさすって上げたい。「褒める」と言うのは人生を褒める、絶望の淵にある人には精神的に何かして上げた

いと。褒めると気が晴れるので良いと、そんな事を先生に申し上げたようです。すると、即座に「ああ、そうですか。痛みを止める、これは医者役目ですね。体をさする、これは家族の役目でしょう。人生を褒める、これはおそらく友人の役目ですね。」とすぐさま分析を頂いたと彼は思い返して言っていました。その頃から機会があるごとに山折先生に色々お教え頂いて今日に至っております。今日は「日本人の心―大人の背中・子どもの素顔」という題で頂戴できるようですので、最後までお聞き頂く事をお願い申し上げます。

中野進先生との 出会いと親交

只今、中野先生からお話がございました様に、進先生との出会いは20年前でございました。ある末期医療を考える為の全国学会が立ち上がった時に、私もその

メンバーの一人として参加致しまして、一番最後のレセプションでしたか懇談会の時に歓談をしておりましたら突然中野進先生から先ほどの三原則、医師としての三原則の話が生まれて、感動致しました。お医者さんの三原則であると同時に、それは人生の三原則、人間の三原則としても受け取る事ができますねと言う事を申し上げて、以来何かにつけて、特に病気で倒れた様な時には中野先生にお願いをして治して頂いて参りました。医学上のホームドクターであると同時に人生上の恩師と言った感じで、お付き合いをさせて頂きました。全く偶然なんです、今私は中野先生の四条病院の直ぐ傍、歩いて3分のところに居住しております。天のお導きかなと思っているところでございます。そういう事もありまして、今日この記念すべき日にお招きを頂いたんだと思います。心からきつ川病院の30周年、お祝いを致したいと思えます。

出迎え三步、 見送り七歩という言葉

私、公務を離れましてからもう8年位になりますが、出張をしない日は朝食の後は新聞を読んで過ごしております。3紙か4紙位読んでおります。只、1時間位新聞を読んでおきますと、すぐ眠気が差して来まして居眠りをしておりません。1時間位居眠りをしてしていると、電話の音とかチャイムの音ではっと目が覚めます。その後はもう妄想が巻き起こって参りまして、新聞の記事が本当なのか自



「日本人のころ
大人の背中、子どもの素」

分の妄想が本当なのか分からない様な、そういう実に何とも言えない楽しい時間を過ごしております。その現実の事実と妄想とを掛け合わせたあたりに一番本当のところが見えてくるのかなと言う、そんな又妄想までする様になって大体お昼です。ですから人様にお目にかかるのは大体午後です。

数年前のことですが、東京からおいでになる方と、近くのホテルでお目にかかる事にしました。その前に、ちよつと時間がありましたので、散歩に出ました。京都の町、路地、小路は、散歩をしておりますと色々な発見があります。まるで歴史を散歩している様な、そういう気分誘われる事があるのですが、それでつ

いつい散歩の時間が長くなってしまい、気が付いたら約束の時間に3、40分遅れていました。はっと気が付いて、駆け足でそのホテルにやって参りましたら、その方がホテルのフロントにお立ちになって、私をお待ちになつて居る。傍に走り寄つて深々と腰を折つて謝りました。そうしましたら、その方が笑顔で浮かべて「いやあ『出迎え三步、見送り七歩』と言いますからね。」一言そう言われたんです。私は電撃に打たれた様な気分になりました。凄い言葉だな、その時思いました。「出迎え三步」の心得であなたをお待ちしていたんですよ。こういうメッセージですよ。本当に恥じ入るばかりの気持ちでした。小一時間話をしていざお別れという事になりました。その時「見送り七歩」って言葉がふつと頭に浮かんできて「これから俺は見送られるのか」、「緊張しましたね。握手をして、手を合せて」「これで私は帰らせて頂きます」お別れしようとしたら黙つてその方は私の後ろを付いておいでになる。「見送り七歩」の姿勢になつておられるんです。ホテルのフロントの前に2人で出てきた時、私は自分の背中が硬直している事に気が付きました。全身汗が流れてきました。私は我が生涯に於いて、自分の背中をこれだけ意識した事は初めてでした。恐らくホテルの前でその方とお別れをして家路を辿つていく、その私の後ろ姿をじーつとその方は見送つておられるに違いない。イメージがすーつと浮かび上がつて来るんです。遅れて行つた私を「出迎え三步」でお迎え下さつた方が、

今度は別れる時に私の後ろ姿を「見送り七歩」のお気持ちですつと見ておられる。「穴があつたら入りたい、どっかに隠れてしまいたい。」と思ひました。緊張して静かに歩を運んで家路を辿つたんですが、その間中「この言葉つて凄いな」と思ひ続けている。「出迎え三步、見送り七歩」こんな言葉を一体誰が考えたんだろう、何処に出て来るんだろう…。そんな事がすーつと頭の中に渦を巻いたまま家に帰りました。

出迎え三步、 見送り七歩の語源と茶の湯

それで手当たり次第調べて見た。図書館に行つたり、辞書をひっくり返したりしたんですが、何処にも出て来ないんです。暫くして、これはもしかすると茶の湯の世界から語り出された言葉かも知れない、と思つたんです。茶の湯の席に参上する時に主人と賓客の間で交わされるマナーです。それを三步・七歩と言う言葉で表現したところに、伝統的価値観の奥深さが封じ込まれて居ると。それで茶の湯関係の資料を当たつたんですが、やはり見つからない。暫くして裏千家の千玄室さんにお目にかかる機会がありました。これは、茶の湯の世界で言われた事ではないでしょうか。伺いました。そうしたら、いや、自分もその言葉を見た事は無いとおっしゃる。只、もしかすると茶の湯の世界から使われ出したのかも知れない、それは十分有り得る事ですねとおっしゃつた。これは出典を探すと

う様な事はもう諦めた方がいい、問題はこの言葉を実践した書物があるかどうかではないか。実際にそれを自分の思想として説いた、そういう人が居るのだろうかという風に、方向を変えてみました。

井伊直弼の著書「茶湯一会集」

そうしましたら偶然なのですが、井伊直弼という人物に巡り会いました。幕末の幕府の大老の役割を務めた方ですね。開国を迫られたあの時代、京都の朝廷も反対、勤皇の志士達も、攘夷の志士達も反対、そういう四面楚歌の中でアメリカとの間で日米和親条約を結んだその最大の責任者です。自分の政策を遂行する為に有意な若い革命家達を引っ捕らえて処刑した、安政の大獄です。吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎、こういった人々が井伊直弼の為に殺されています。そういう事もあって戦後の歴史学の教科書、世論ともそうですが、井伊直弼に対する評価は非常に悪かった。逆臣、日本国を売った人間、そう言う評価です。私もそういう点で井伊大老という人物に良い印象を持っていませんでしたが、ある奇縁で実は井伊直弼が非常に深い茶の湯の世界で生きていた人だと言う事を知るようになる。実はその井伊直弼が死ぬまで朱を入れて文章を推敲していたという、遺作となった書物がございまして、それが「茶湯一会集」という書物です。一会とは一期一会の一会です。茶の湯の席で出会う人と人との出会いは、命を懸けた出会いである。最初の出会いであり最後

の別れだ、そういう機会である、こういう思想ですが、実はこの一期一会という言葉、最初に言い出した方は千利休の弟子でした山上宗二ですが、しかしこの山上宗二が言った一期一会はその後の茶の湯の歴史の中で必ずしも大きく膨らみを見せた訳ではなかった。もう少し詳しく考証してみなければ分かりませんが、井伊直弼の「茶湯一会集」によって大きく取り上げられる様になったのではないかと、私は想像しているのですが。ところがこの「茶湯一会集」は当時普通の本で読む事が出来ませんでした。で、あるつてを辿ってテキストを手に入れて読んで、初めて知ったんです。

独座独服という茶の湯の極意と心の作法

その「茶湯一会集」の中で井伊直弼が様々な事を言っていますが、その中に独座独服という言葉が出てくる。茶の湯の極意がここにある。独座って言うのは一人で座る、独服って言うのは一人で茶の湯を服する、それで独座独服です。では、その独座独服の極意とは一体何か、その作法とは一体どういうものかという説明に入っていく訳です。茶の湯の席を設けて客を招待する。主人はそのお客を門の外に出てじつと待つ、もうそこで「迎え三步」なんですね。もちろんこの著作の中で井伊直弼はそういう言葉を使っている訳ではありません。客がやって来るのを丁寧に迎えて誘って茶室まで導く、それで1対1で対座します。茶を点

てて差し上げる、そして話を交わす、時間が経って別れの時が来る、再び主人は客を導いて門外に誘う、門外に立つて客が去って行く姿をじつと見送る、ここが見送り七歩です。茶の湯の席の作法に付いては沢山の書物がそういう事を書いておられます。何も井伊直弼の文章による必要は無い訳です。彼が独座独服と言うのは、この後の事なんです。客がその門前から去って行って姿を消す、それをずっと見送り続けた主人が踵を返して一人で茶室に戻って来る、一人でその茶室に座る、これが独座。茶を点ててその茶を一人でゆっくり服する、これが独服です。その一人座って、一人茶を服するその時に、ずっと去って行った客人の事を思い続ける、ここですね。凄い話 شدと私はそのくだりに来た時に思いました。茶の湯の極意は「独座独服」にある。利休が戦国時代、武士と武士、命を奪い合うその時代に、人間と人間の最も根本的な付き合いかの作法をそういう形で書き残してくれている。井伊直弼はその心の作法を言葉にしただけなのでしょう。これは解説者の方が書いていますが、井伊直弼は万延元年、桜田門外で水戸浪士によって暗殺されます。この暗殺されるその朝まで朱を入れていたのではないのか。井伊直弼は暗殺を覚悟していたのでしょ、おそらく。不思議に茶の湯の歴史には血の雨が流れています。先程申しました山上宗二が、利休の高弟の一人ですが、小田原で豊臣秀吉の逆鱗に触れて死を賜っております。耳を削がれ鼻が削がれ残酷な殺され方をしている。利休自身が

秀吉によって切腹を仰せつかった。もう一人、古田織部と言う大名がおりますが、これも後に家康、秀忠に裏切りの嫌疑を掛けられてやっぱり死を賜っている。そして井伊直弼ですから、茶の湯の世界は何か血の匂いが立ち昇って来る様な世界を一面で持っているという気がします。そういう一期一会の出会いの場、茶の湯の心得を示す為に、独座独服と言った言葉が出てきたとすると、あの「出迎え三步、見送り七歩」と言う考え方はですね、そういう我々の先人達の生き方、死生観と言うものをやっぱり反映しているのでは無いだろうかと思いた。

温かい背中、冷たい背中

その事と背中の問題が繋がる訳です。茶室から去っていく、どのような背中を見せて長い道のりを歩いて行くか、その背中を主人がどういう気持ちで見送り続けるか、これが私には大切な問題の様に思えて来ました。私は子供の頃から病気がちで入院を繰り返した経験がありますが、まだ若い頃です、胃腸を半分胃潰瘍で切除しまして、それが再発して40日間東京のある病院で入院しております。午後の回診が終わると、病室にはどなたも訪ねて来ません。お医者さんが来て回診して、看護師さんが来て点滴を取り替えてくれる等々の処置をする、その後にはもう誰も訪れる人が無く、5時位の早い夕食を食べたら後は何もする事が無いんです。退屈の時間が流

れるだけ。入院患者にとつては、退屈で、病気があんまり思わしく無い時には不安で。その頃の事だっと思えますが、病室には見舞客、お医者さんそれから看護師さんと色んな方がおいでになります。が、病室を去って行く時のそれぞれの背中が段々気になりますね。温かい背中もあります、しかし冷たい背中もあるんです。それはお医者さんの場合も、看護師さんの場合も、見舞客の場合もそうです。人間の背中にはこれほど様々な表情があるものかと言う事を、入院体験の中で知りました。その時はまだ、自分の背中がどのように人様の前で映っているかと言うところまでは、考えが及ばなかった。入院患者の身勝手な感想です。私は入院して初めてまじまじとお医者さんと看護師さん達の背中を見ました。温かい背中に接した時はその晩は非常に安心して眠りにつく事が出来ます。これは不思議です。冷たい背中に接した晩はイライラしたり、刺々しくなったり安眠出来ません。ちよつと極端な事を言っております。そういう事が有りまして、やっぱり背中というのは重要だという事を無意識の内に感じていたんだろうと思えますが、その事を痛烈に教えて貰ったのが先ほどの「出迎え二歩、見送り七歩」と言われた方との出会いでした。いざ人様に自分の背中を見せるという段になってなすところを知らない。自分のその時の人間が全部その背中に現れてしまうのでは無いかと言う不安感に襲われました。70を過ぎてそう言う状況でございました。三尺下がって師の影を踏まずって言葉、旧制中

学時代に教えられた言葉ですが、あれは自分の師を尊敬する為に三尺下がると言う風に理解していましたが、最近解釈を変えて、師匠と思う人間の背中を見よと言う声にも聞こえて来た。三尺下がれと言るのは一種の道徳的強制の感じがあり、あんまり好きじゃない。黙って師の背中を見て歩いて行け。こういう言葉として理解すると、この言葉もなかなか含蓄があるなあ、なんて思う様になりました。

世阿弥の夢幻能に見る 役者の背中

それからもう一つ背中の問題で申しますと、お能の舞台は私に背中って事を改めて思い出させてくれました。私は能・歌舞伎は好きで良く行くんですが、只です、能が始まって5分位経つと大体眠気が差して来る、10分経つと完全に眠っています。大体お能の台詞がはつきりしません。予め台本を読んでいて何となしに筋道位は分かれますけれど、その場での言葉がピンとなかなか響いて来ないと言う事かも知れません。それであのゆっくりとした動作ですよね。だから自然に眠気が差して来る。ところが不思議な事に、終わりに近づいて後5分、10分で終わるって言う段階になってパツと目が覚めます。これは不思議ですね、最後まで眠りかけている事はありません。それなりの理由があるって事にある時気が付いた。世阿弥の「夢幻能」というお能になりますと、あれは亡霊がシテとなつて

舞台に現れて来るんですが、亡霊が現れて来る前に、諸国一見の僧と言うお坊さんが直面^{じくめん}で出て来ます。面を被らない出家僧の姿をした役者が舞台に出てきて、舞台中央の辺りで今申し上げた諸国一見の僧とやる。九州の筑紫から出てきて、京都の桜の名所を巡って眺めてみたい、と言った名乗りを上げます。秋だと紅葉の名所を巡り歩きたいと言う様な事を、最初に名乗りを上げます。自分は諸国一見の僧である、諸国を巡り歩く遍歴僧である。遍歴僧であると言うよりはむしろ乞食僧と言ってもいいかも知れませんがね。で、この乞食遍歴僧、諸国一見の僧の事を、お能の舞台ではワキの僧とも言っています。冒頭に出てきてスツツと名乗りを上げて正面右手の柱の下に座るんです。座ったままその能舞台がはねるまで一言も発しない。例外はありませんが。じつと亡霊が口説く、その口説きを聞いているんです。その内にシテが出て来て舞いを舞って、かつて自分は栄光の時代を過ごした何々の武将である、女性ならば華やかな宮廷生活を送っていたという者であると言って、しかしそれが栄華の時代が失われて悲惨な人生をこれまで歩んできた。口説きに口説いて、舞いを舞っている内に段々心が静まって、そしてシテは又舞台を去って行く。それは何故かと考えますと、口説きに口説くその人の人生の全てをじつと聞いていたワキの僧が居るからだと言うのが分かる、私の解釈ですが、で、はつと思つ、あのシテを演ずる亡霊は、あれはクライアントである。それをじつと一言も発

せずに、聞いて聞いて聞き続けるワキの僧は、諸国一見の乞食僧は、これはカウソセラーである。その関係があの中世の舞台で殆ど完璧な形で再現されている、と思つた時驚きました。人生のレベルに移し変えて見ますと、親と子供の関係、教師と生徒、学生との関係、会社では上司と部下の関係、それは究極的にはお能の舞台の流儀によると、クライアントとカウソセラーの関係、徹底的に聞く人間が居て初めて亡霊の世界は癒される。そう言う舞台なんだなと思えました。日本の演劇の世界って凄いな、世阿弥という人間の凄さみたいな、奥深さを私は感じます。で、背中の問題ですが、そのシテはシテなりに、ワキはワキなりに役割を果たした後、皆舞台を去って行きます。その去って行く時の能役者の背中がいい。これが、本当に深い平安な気持ちに誘ってくれる背中をそれぞれの役者の背中がみせていると、思う様になった。一つの物語が終わって、シテが去る、シテツレが去って行く、ワキが去って行く、ワキのツレが去って行く、橋掛かりを通過して幕の彼方へ消えて行く。一人一人、去って行く役者さんの背中それぞれ個性がある。人間の正面像なんてものはあやふやなものだ、背中にこそその人間の個性、存在感が滲み出て来ると思いました。殆どの役者が去って行って、一番最後に立ち上がるのがワキの僧である。舞台を横切って、そして幕の彼方にゆっくり去って行く訳です。能の舞台には世界の演劇史の上では珍しい、幕が無い。引き幕も、上げ幕も無い。だから拍手も出来ない。

最近では一番最後の最後に拍手をする新しいマナーが出来た様ですが、あれは拍手は無い方がいいんでしょうね。主人公が皆この世から消えて行く訳ですから。

柳田國男による「桃太郎の誕生」について

暫く前、中野先生からお電話がありました。これからの医療は地域医療に力を入れなければならぬ、その為に我々医師達は日夜苦心算段している。その為に参考になる文献を、何か有りませんか？こう言ってこられた。私は咄嗟にお答えしました。それは民俗学者の柳田國男さんの全集をご覧になればあの中に色々な意味のある、これからの医療、地域医療にも役立つ様なヒントとか、アドバイスが満載されているかも知れませんが、こう申し上げた。私は年来、柳田國男、折口信夫の仕事に日本の民俗文化の中に残されて来た様々な日本人の知恵、生きる為の知恵、ライフスタイルを支えている遺産が沢山あると思っております。今改めて読む事になっている。そういう自分の関心もありまして中野先生にそうお答えしたんです。その柳田國男の民俗学の中の、あるエピソードについて話をしてみたいと思います。それは、どなたでもご存じの「桃太郎」の話です。この「桃太郎」という昔話に対して、柳田國男は大変な発見をしている。ところが柳田國男が発見した事柄が今日の社会では殆ど忘れ去られていると思います。で、どういふ発見をしたのか、どこに今日の社会が

少しはヒントを得てもいい、そういう話があるのか、それを申し上げてみたい。私は今年で79才になります。昭和6年生まれですが、我々の世代は子供の頃から桃太郎の唱歌を歌って来ました。明治20年代、30年代に桃太郎の昔話を主題にした唱歌が作られている、当時の教科書に載っています。お爺さんが山に芝刈り、お婆さんが川に洗濯、川の上流から桃が流れて来て、それを持って帰って割ると、中から可愛い子供が生まれる。大事に育てると桃太郎と言う美しい立派な少年に育った。その桃太郎が犬・猿・雉を連れて鬼ヶ島征伐に行つて、金・銀・財宝を獲得して凱旋したと、こういうお話ですよ。明治20年代・30年代、日本の近代

国家が新しく誕生した時代です。殖産興業・富国強兵、世界の帝国主義戦争の中で、いかに近代国家として強力な国作りをするかという、その上昇気流に乗った時代に作られた唱歌です。日清・日露に勝利してさあこれからだという時の桃太郎話です。ところが大正10年になって柳田國男が、日本列島に伝えられた桃太郎の本当の話はそんなもんじゃないよという事を実証します。その研究成果を明らかにした書物が「桃太郎の誕生」という論文集になって出版されます。柳田國男は日本全国足マメに旅をして日本民族の昔話を採集し続けました。私は柳田國男さんがやられた仕事は沢山あると思いますが、その中でも「桃太郎の誕生」とい

う作品は傑作の一つだと思っています。

日本の土着の信仰、「母子神信仰」

それでは、その桃太郎という昔話の本当の原型は何か、柳田國男は、北は東北から、南は九州まで、様々な桃太郎話のバリエーションを採集し分類し、分析して、そのオリジナルフォームつてものを考え出した。その原型の話はこうです。ここで中心的な役割を果たすのは、お婆さんではなくてお爺さんです。お爺さんが山に芝刈りに行く、その刈り取った芝を背負つて戻つて来ると、そこに沼がある、あるいは池という場合もある、その沼・池を見て、お爺さんは刈り取つて来た芝の全部をその池に投げ入れる。するとその池の水底からすーっと一人の美しい女性が浮かび上がつて来た。見るとその美しい女性は手に一人の子供を抱いていた。その子供を抱いた女性がお爺さんの所に近づいて行つてこう言った。「あなたは労働の成果としての大切な芝を、この池の中に投げ入れて下さった。そのお返しにこの子供をあなたに差し上げるから大事に育てなさい。」と言つて渡してすーっと池の底に沈んで行った。お爺さんが不思議な事があるものだと思つて、その女性から貰つた子供の顔を見ると、これが醜い顔をした子供だった。柳田さんはこの話をつぎのように解釈しております。池の中から浮かび上がつて来た女性は水の神である。山は水の源流であります。子供を抱いていた所からすれば、同時に母でもある。母神である。



古来、日本人は母と子供の結びつき、これを非常に大事にして来た民族である。母に対する信仰、子に対する信仰、その両者の結びつきと言うものを大事にする信仰、この三者が寄り集まって「母子神信仰」という信仰を作り上げた。日本には仏教とか儒教とか、それからキリスト教とか、様々な宗教、あるいは文明、技術が外国から伝えられています。日本列島の土着の信仰、民俗社会に伝えられた信仰は、この母子神信仰だと、こう言うんです。これは今になってみると、非常に鋭い重要な指摘だと思えますが、大正10年から昭和にかけての時代は圧倒的な西洋文明上位の時代です、全ての問題は西洋から来る。知識・技術・信仰、宗教の果てに至るまで、良きものは外からつていう。だから、この柳田さんの提言は、当時の多くの人の心を捉える事が出来なかつた様な気がします。今日の我々の社会を考えてみますと、母・子、母と子の絆、この関係がいかに重要な問題を抱えているか、どなたでもお判り頂けると思えます。ところがその柳田國男が発見、発掘した問題意識が、今日の我が国の教育の場で殆ど生かされていない、と私には見えるんです。

インドウー教的世界で誕生した神様ですが、それが仏教に取り入れられて観音になりまます。この時の観音菩薩のジェンダーは男性です。それがやがて中国に伝えられ、中国から韓半島そして日本へと伝えられて来ますが、日本に伝えられた当初は、観音さんは明らかに男性の姿をしております。奈良時代・平安時代の観音菩薩は男性形です。ところがこれが中世から近世にかけて大変化を示しまして、どんどんどんどん女性化していく訳です。観音様を今、我が国では男性だと思っている人は、殆どいないんじゃないでしょうか。江戸時代になってこれは悲母観音、慈母観音とこう言われる様になる。母神なんです。そしてやがて子供も抱く様になる。これ、キリスト教の影響があつたかも知れませんが、子安観音、安産観音、母親の為の守り神、子供の平安の為の守り本尊、その総称としての悲母観音・慈母観音ですね。完全に女性化してしまつて、今日我々の心の中に住み着いてしまつた。おそらく外来仏教の一翼をなした観音が、この日本列島に上陸して女性化した事の背景に先ほどの柳田さんが言われた母子神信仰という太い水脈があつたからだと思います。これは、日本の文化は外から入つて来る物を、実に自由に自在に変化させて我々の背丈に合った物に組み替えてしまう、これ凄い技術です、日本文化の特色です。発信機能はそれ程でも無いけれども、受信機能にかけては世界に冠たるもの、世界随一かもしれない。そのことを考える上でやっぱり土着の母子神信仰と言う日本人



固有の信仰があつた事が、非常に重要だと思えます。もつとも柳田さんには仏教嫌いのところがあつて、この桃太郎の昔話を観音信仰との関係では分析してはおりません。

池に投げ入れた柴の謎

私はその柳田さんの見事な解釈を読んで感銘を受けたのですが、その柳田式分析の中にどうしても分からない2つの問題に気が付いた。1つは、何故お爺さんは柴を池の中に投げ入れたのか、この説明をしております。もう1つは、何故その女性が水底から抱いて来た子供が醜い顔をしていたのか、これについても、やはり何も言っていない。それが喉に突

き刺さつた骨の様に、いつまで経つても気持ちが悪く着かなかつた。随分考えました。5、6年前の事でした。丁度地球の環境問題が日本でも世界でも大きな話題となつた頃の事でした。それが閃きの原因になつたと思えますが、もしかすると柴を沼に投げ入れる事によって、濁つた沼が清められる、水が浄化する、そういう作用が柴にあるのでは無いかかと。本当に私はそつちの方面の事は知らないんですが、そういう考えが閃いたんです。丁度その頃、若狭の三方五湖に招かれる事があつていきました。あそこに縄文博物館という素晴らしい博物館があります。その縄文博物館でこの話を館長さんに持ち出したところ、それは柴を池の中に投げ入れて、そこに魚が寄つてくるんだよと、魚を捕る為に柴を投げ入れるという漁法は今でもやっている、三方五湖で。驚きました。水を浄化すると言っただけでは無かつたんですね。水清き所、魚も住むですよ。ああ、そこに魚がやつて来てそれを捕るために柴を投げ入れたんだ。そして同時にそれは沼自体を清らかにする、そういう作用を持つ。なるほどそうすると、桃太郎の話って言うのは、環境浄化の物語としても読める、こう思う様になりました。そのあと暫くして、琵琶湖博物館の館長さんから、それは「柴漬漁」って言う専門的な言葉がちゃんと出来上がっている漁で、資料を出して来て私に教えて下さつた。以来あちらこちらに行つてその話を持ち出すと、「柴漬漁」は日本全国どこでも行われていたと言う事が、段々分かつてきた。

そうするとそのお爺さんが沼の中、池の中に柴を投げ入れるって言う事に付いて柳田さんは何の説明もされていなかったけれど、それはもう当り前のことであつて、単に私が無知だったからに過ぎない。当時の柳田さんに取っては当たり前で特に説明するにあつたらない、そういう情報だったんだと思う様になつた。

子供達の心に 寄り添う姿勢の良寛

もう一つが醜い子供の問題ですね、これは難問でした。何故、女神は醜い子供を大事に育てると言ったのか。これもある時間がありました、もう閃いてばかりなんです、あまり論理的な話じゃないのかも知れません。ふと、良寛の事を思い出したんです。良寛は子供好きの坊さんとして知られています。新潟の出雲崎、庄屋の生まれで庄屋を継がずに国仙和尚と言う禅宗のお坊さんにくつついて旅に出て、帰って来て後は放浪僧の生活です。先ほどの諸国一見の僧ですよ。ああ、良寛の様な人物の事を世阿弥は前提にして書いたんだなと思う様な遍歴僧ですが、これがただ者では無いんです。中国古典に関する知識はもの凄いなものがありました。それから、万葉集に関する注釈書、殆ど読み切つている。万葉学者、中国古典学者としても通用する位の力があった人だと思えます。それは、彼の漢詩を見れば良く分かります。しかし、そういう事を一切書物や文章にはしません

でした。道元は「正法眼蔵」と言う難しい書物を書いておられます。親鸞は「教行信証」と言う、これ又ややこしい書物を書いておられます。日蓮は「立正安国論」、日本を代表する宗教家は皆もの凄いな書物を書いておられます。そういうものを書くだけの知識・情報を持つていながら良寛は一切そういう事をせずに歌ばかり作り続けた、或いは書だけに集中したと言うところがあります。漢詩の世界はその良寛の端倪すべからざる知識の量を垣間見せてくれる。その漢詩の中に「永平録を読む」と言うのがあります。永平録って言うのは永平寺を作つた道元の書物と言う意味ですけど、まず正法眼蔵と言つていいでしょう。その漢詩によりますと毎晩の様に良寛さんはこの正法眼蔵を読んでいるんです。読んで、読んで、深夜に至つて感動の余り涙を流したと、こう書いてある。やがて夜が白々と明けてきた。徹夜して読んでいたわけです。明け方になつて隣のお百姓さんがトントンと扉を叩いて入つて来た。見ると膝の上に置いていたその正法眼蔵が濡れていた。それは感動の余り涙を流して濡れた書物ですが、それを見てそのお百姓さん、何でその本が濡れているんですかと、こう聞いた。それに対して良寛、こう答えているんです。昨夜、屋根に降り積もつた雪が溶けて、滴り落ちてその雫で濡れたんだよ、とこう書いてこの漢詩を締め括つている。自分は道元って言う凄いな書物を読んでそれで感動して涙を流して、それで濡れたんだよなんて一言も言わない。この良寛の人間性と言いますか、

恥じらいを知る含羞の人って言う感じがあります。その良寛が冬から春になつて庵を出て、里に出て来ます。その時に作つた手毬歌という歌がよく知られております。これは良寛の代表作と言われて、万葉調の長歌の形を取つております。季節がようやく春になつて、冬籠りの時は、書を書いたり、歌を作つたり、道元の書物を読む以外に無かつた訳ですが、いよいよ里に出て来て、胸を大きく開いて大気の中に出て来る。その喜びに溢れた言葉でこの歌は始まるんですが、出てきてまず最初にやらなければいけない事は、自分は坊主だから乞食の行をしなければいけない。こう思つて出て来るんですが、たまたま子供に会つてしまふ。それが1人、2人、3人、4人と段々増えて来る。行乞をしなければならぬと思ひながら、ついそれをさぼつて子供達と遊んでしまふ。手毬をついて、歌を歌つて、気が付いたら日が暮れていた。それだけの歌ですが、ある意味こころに沁みて来る。ああ、良寛と言う人は自然が好きだったんだ、子供達が好きだったんだ。その、好きで子供達と遊ぶ、それがどこか尋常ではないなつて、そう言う感じは与えるんですが、あまりそこは深追ひはしなかつた。どの解読書を読んでも、その辺りで止まつていた様な気が致します。あの時思つたんですね。お前なら、子供達と一緒に遊んで何時間持つつて。手毬をつく様な単純な遊びで何時間持つつて。1時間持ちませんよ、30分で飽きが来る。それが2時間、3時間、4時間ずーっと遊び続けるとは、大変なことだな、ある

時はつと思つた。一体、何故良寛はそんなに長い時間、ずーっと遊び続けたのか。これが新しい疑問となつて浮かび上がつて来ました。考えて見ますと、あの時代の子供達は殆ど捨て子同然の子供達が、うようよしていたと思ひます。両親が揃つていない、揃つても喧嘩ばかりしている、仕事に出払つていて、一緒に食事なんかした事がない、貧乏と差別の社会。そう言う社会で大量に発生する子供達、捨て子群衆です。そうすると、その顔つて言うのは当然歪んでいる。泣き叫ぶ奴、苛める奴、餓鬼大将、悪鬼の如き子供、言う事を聞かない様々な子供が居たに違いない。そう言う子供達を手元に留めておいて、普通の表情になるまで一緒に遊んでいなければならぬ、とある時良寛は思つたんじゃないでしょうか。普通の素顔に戻す為だけに、彼は子供達と長時間遊び続けたのかも知れない、こう思つたんです。現代の日本の子供達と同じですよ。捨て子の状態に置かれていた子供、その大量発生って言うのは何も今に始まつた事じゃない、人類の歴史が始まつてからずっとそう言う世界で我々は生きて来た。我々自身が最後は捨て子になる訳です。両親を失い、地位を失い、最後は一人で死んで行かぬやならない。捨て子という運命こそが正に人間の運命そのものを表している。その捨て子達の原型みたいな者に恐らく良寛は出会つていたのではないのだろうか。色んな表情をしている子供達のその表情が普通の姿に、普通の素顔に戻るのにどれだけの力が、時間が掛かるかって言う事なんです。



山折 哲雄 (やまおり てつお)

宗教学者、国際日本文化研究センター名誉教授

1954年 東北大学文学部印度哲学科卒業
1959年 同大学院文学研究科博士課程修了
1969年 株式会社春秋社編集部入社
1977年 東北大学文学部助教授
1982年 国立歴史民族博物館教授
1988年 国際日本文化研究センター教授
1997年 白鳳女子短期大学学長
2000年 京都造形芸術大学大学院長
2001年 国際日本文化研究センター所長
(～2005年5月)

受賞歴
2001年 京都新聞大賞 文化学術賞
2002年 和辻哲郎文化賞
2003年 日本放送協会放送文化賞

著書
『親鸞をよむ』岩波新書、2007年
『山折哲雄セレクション 生きる作法1～3』小学館、2007年
『歌』の精神史』中央公論新社、2006年
『日本文明とは何か』角川書店、2004年
『美空ひばりと日本人—増補版』現代書館、2001年
『神と仏—日本人の宗教観』講談社現代新書、1983年
『日本仏教思想論序説』三一書房、1973年
『人間運命』春秋社、1970年、他多数

そう思った時にあの桃太郎の話が浮かび上がった。あの女神が醜い子供を老人に渡して、大事に育てなさいと言った事の意味はもしかしたらそういう事だったのではないかと思っただけです。でも、これは分かりません、本当にそうかどうか。

子供に備わる笑顔の力

こうなると、桃太郎と言う昔話は、環境浄化の物語としても読めるし、子育ての物語としても読める。少年少女の成長物語としても読める。やっぱり、凄いなと、日本人の社会に広く伝えられて何世代にも渡って大きな影響を与え続けている、その桃太郎の話の奥深さです。しかも問題なのはその桃太郎昔話のいわば原型の姿を今日の我々は忘れてしまっている。この方が問題かも知れません。我々の文化・伝統には様々な豊かな遺産が沢山残されている。それを単に形の上で遺したり、形の上で継承したりして

いつていられるだけでは、やっぱり本当の継承には繋がらないのではないのか、そんな気がします。今日はちよつと偉そうな事を言っただけだったので、最後はパランスを取るために、私の貧しい体験をエピソードとして申し上げたいと思います。私は還暦を迎える頃まで子供が大嫌いでした。自分には子供がいるんですが、子供ってのは不気味な存在でして、理解しようとしてもなかなか理解する事が出来ませんでした。子供はときどき、要領を得ない事を言うんですね、意味不明な事を。ある時は大人の心臓を突き刺す様な事を、残酷な事を言ったり、やったりします。今日の少年達の残酷な事件は、子供が本来持っているそういう残酷性みたいな、説明を付けるにしても付けようのない、何かが爆発しているって感じがします。そういうこともあって、私は子供は苦手でした。子供と一緒に遊ぶような気は殆ど持った事が無い。私は京都に来て前半の10年間は洛西に住んでおりま

して、洛西ニュータウンと言う、フラットな社会へ来て生活していたんですが、ある日曜日、散歩に出たんです。公園の中に入って行きましたら、そこで小学5・6年の子供達が、4、5人で遊んでいました。私は何気なくぼーっと立って見ていたんです、子供達の遊びを。そうしたら、その中の一人の女の子が、ふつと振り返って私と目と目が合ったんです。その時、我とした事がその女の子に笑顔を見せておりました。にこつと笑顔を向けたら、その女の子がこれ以上無い美しい可愛らしい笑顔を見せてくれた。私は初体験でした。60年生きて来て、これだけ純な笑顔っていうものを見た事が無いとその時直覚したんです。驚きでした。ちよつと大げさに言うのと、私にとつての至福の体験って言うのがその時だった。それで、その時の体験が忘れられずに、翌日から私は道を歩いていて子供を見つけると、にこつと笑う。初めは実験的ににこつと笑って見る。必ず笑顔で返してくれそうです、子供って言うのは。えーっと思つて、会う子供会う子供にニコニコ、ニコニコと笑い掛けると、例外無く笑顔で返してくれる。これも大発見でした。そしたらある時、そうやって私が笑い掛けたら、女の子が傍へ寄って来まして、私と一緒に歩いて歩き始めた。5歩、10歩位まではいいですよ。ざーっと歩き続ける気配なんです、段々不安になつて来ました。不安になつて来て、どうしたものかと思つた時、後ろの方から若いお母さんらしい人が、息せき切つて駆けつけて来て、その子供の手をぐつと

取つて私を睨み付けて向こうへ行つてしまった。人さらいに間違えられたんですよ、私は。この時のショックと言うか、これは大きかったですね。人さらいと間違えられた事で傷付けられたんですが、暫く経つて良寛の事を思い出して、ああ、良寛も人さらいだったんだ、彼は出会う子供達を自分の元に引き寄せて、黄金の時間・空間を作ったんですね。良寛は両親の手元から子供を奪つた、人さらいだ、社会の掟からも奪い取つた。一切のしがらみ、それを切り払つて子供達と遊ぶ、そういう黄金の時間空間を作り上げた見事な人さらいだったのではないのか、と思つた時、多少心が安らかになりました。だけど、因果な事に私はまだ子供が余り好きにはなれません。自信が無いんです、本当に自信が無い。子供達、学生達を教えるって事は、如何に難しいかと、この年になつて本当に痛感しております。今日は偉そうに「大人の背中、子供の素顔」と言つたタイトルを出させて頂きました。長時間にわたつてお話をさせて頂きました事、心に疚しい気持ちを抱きながらの1時間ありがとうございました。どうもご静聴有り難うございました。

2010年 10月9日
京都ブライトンホテル・英の間で行われた「2010年 京都きつ川病院創立30周年記念講演会」をまとめて掲載させていただきます。

パートナー医院を紹介します

安見内科医院

院長 安見正仁 先生

内科・放射線科・リハビリテーション科

〒610-0117 京都府城陽市枇杷庄背田37-9 タクトビル2階

TEL(0774) 55-0633



かかりつけ医として、 きめ細かい対応を

安見内科医院は、1988年に近鉄富野駅のそばに開業して以来、内科、リハビリテーション科、放射線科として、地域の方たちの厚い信頼を得てきました。2010年5月には、医院を移転リニューアルし、駅にさらに近くなりました。「地域の皆さんにとって身近なかかりつけ医として、できる限り幅広く、きめ細かく対応しています」と、おだやかに話す院長。風邪や腹痛、頭痛から、高血圧、糖尿病などの生活習慣病、さらに心臓病、腎臓病、脳梗塞後遺症など、さまざまな病気の診察、治療にいてねいに当たっています。「内科的な症状に限らず、あらゆる身体の不調を診察しています。時には、夜に往診されることもあります。また、奥様がケアマネージャーをされていて、早くから介護支援、訪問診療、看護も行い、地域の在宅介護を強力に支えています。

心強いきづ川病院との連携

日々、こうした多様な対応をするなかで、「ほとんどの専門科が整っているきづ川病院に、安心して多くの患者さんをおまかせしています」と、専門的な検査や治療、入院が必要な患者さんを、きづ川病院に紹介しています。院長自身が救急車に同乗して病院まで行くこともあるとか。「夜間や休日でも、いつもスムーズに受け入れてくださり、とても助けていただいています」と、心強く思っているとのことでした。

また、きづ川病院で治療を受けた患者さんが退院され、在宅治療される場合のフォローを、安見内科医院で行う場合も少なくありません。

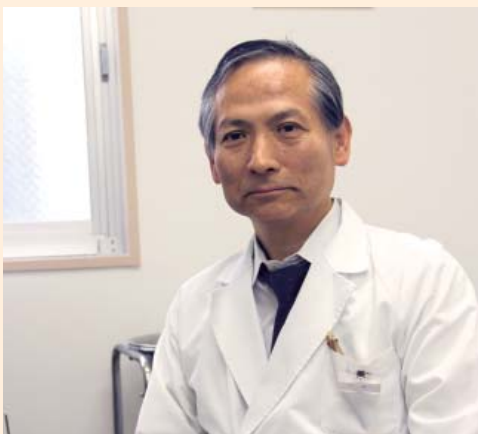
「患者さんの情報を細かいところまで共有して診察を進められるように、お互いによく話し合っています」と、常にコミュニケーションをとりながら、連携しています。

さまざまな連携を強めて、 地域の健康を支える

20数年間、地域の多くの患者さんを診て来たなかで、これから、かかりつけ医としての役割がますます強くなっていく

と実感しているという院長。「ちょっと早めに診察を受けてもらえれば、回復も早く、予防にもつながるので、患者さんがどんな小さな心配ごとでも気軽にご相談いただけるよう、心がけています」。そして、きづ川病院をはじめ、総合病院や専門病院、介護施設、行政との連携をよりいっそう強め、「一緒に地域の人たちの健康を守っていききたいですね」と、意欲的です。

クラシックを聴くことが、最近の楽しみと言う、温かな院長を中心に、アットホームな雰囲気にも包まれた医院です。



京都きづ川病院創立30周年記念講演会・祝賀会 10月9日 挙行

京都きづ川病院の創立 30 周年を記念して、今日まで暖かく見守り、支えてくださいました地域の方、行政の方、医療界の方、そして病院職員に参集いただき、創立 30 周年の祝賀行事が 10 月 9 日京都ブライトンホテルで盛大に開催されました。

午後 2 時から宗教学者で国際日本文化センター名誉教授の山折哲雄先生の講演「日本人のころ～大人の背中・子どもの素顔」があり、今日の日本社会で問題となっている事件や病理は、日本人としての精神の衰退や倫理性の喪失が大きく影響しており、日本古来の伝統や文化のなかに息づいている先人たちの豊かな遺産のなかに今日の我々の社会で忘れ去られている大切なメッセージが沢山遺されていると、茶の湯や能、昔話、土着の信仰を基にご講演いただきました。


講演後祝賀会が開催されるまでの間、喉を潤していただきながら 30 年前の開院披露パーティーの様態を写真パネルでご覧いただき、懐かしい方々の写真をまえに開設当初の思い出などを語る一時をすごしていただきました。

午後 5 時、武部宏氏の司会で開宴、金剛流能楽師 広田幸稔氏と囃子方による祝舞「高砂」に始まり、理事長中野博美の挨拶、京都府知事代理太田副知事の祝辞、橋本城陽市長の祝辞を頂戴し、野中広務氏の乾杯のご発声と滞りなく進行し、女性トリオによる演奏が流れるなか和やかに宴が進み、午後 7 時 30 分、丸山院長のお礼の挨拶があり、名残を惜しみながらお開きとなりました。



謹賀新年



京 都 四 条 病 院	院 長	中 野 昌 彦	
京 都 き づ 川 病 院	院 長	丸 山 恭 平	
き づ 川 ク リ ニ ッ ク	院 長	鯉 江 久 昭	
介 護 老 健 施 設 萌 木 の 村	施 設 長	大 隅 喜 代 志	
介 護 事 業 所	所 長	一 同	